

鳥さし (祇園一力の段)

鳥刺掉も其儘に

堪った色ではないかいな

手足延して捕らんとすれば

其時あいつが口癖に都々逸文句も古めいた

鳥はどこえか随徳寺

晩に忍べと云ふた故

さすぞへ

思案途方に立止り

紺の手拭で顔隠し

さすは盃

シタリところてんではなけれ共

いつも合図の咳払ひハツクサメ

初会の客よ

突出されても自分もの

噂されたを評判に

手にはとれども初心顔

是じゃ行かぬと

幸ありや有難き

さいてくりよ

捨鉢に跡はどうなれ

実に御ひいきの時を得て座敷の興も面白き

これ物にかんまへて

ひく三味線の

息せき楽屋へ走り行く。

先づこれ物にかんまへて

気も二上りか三下り

ちよつとさいてくりようか

浮いて来たタタ来たさの酒の酔ひ心

さいたら子供に羽根やるな

四条五条の夕涼み

ひわや小雀や四十雀

芸妓たいこを引連れて

瑠璃は見事な錦鳥

上から下へ幾度も

こいつは妙々

ゆたかな客の朝帰りカア

奇妙鳥類何んでもござれ

鴉鳴きさへエントうまい奴めと

ねぶつはそばで禁物と

なぶりおかめからそこらの目白が

目当違はぬ稲むらを

見つけたらさぞせきれいであるつのに

狙ひの的とためつすがめつ

日がらひばりの約束は

いでや手並を一ト刺と

いつも葭切顔鳥見たさ

一散走りに向ふを見て

文にもくどう駒鳥の

きよろつき眼

そのかへす書きかへり事

あちこちと

なぞと口説きで仕かけたら